

2:1 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。 2:2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、【主】と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。 2:3 「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」 2:4 天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。 2:5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。 2:6 「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」 2:7 「わたしは【主】の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。 2:8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。 2:9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」 2:10 それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。 2:11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ喜べ。 2:12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

はじめに

先週、OIC で詩篇 1 篇を学びました。そこで強調されていたのは神の教えでした。

一方、詩篇 2 篇の焦点は預言です。

詩篇 1 篇は、神の教えを喜ぶ人は幸いだと語ります。しかし、詩篇 2 篇に登場する人々は、神の教えに反抗的です。

詩篇 1 篇は新約聖書で一度も引用されていませんが、詩篇 2 篇は、少なくとも 17 回、引用または言及されています。

これは、新約聖書でもっとも頻繁に引用されている箇所です。

新約聖書での引用箇所は次のとおりです。

マタイ 3:17,17:5、マルコ 1:11,9:7、ルカ 3:22,9:35、ヨハネ 1:49、使徒 4:25-26, 13:33、ピリピ 2:12、ヘブル 1: 2,5,5:5、黙示録 2:26-27, 11:18, 12:5, 19:15

詩篇 2 篇は救い主に関する詩篇です。

つまり、この詩篇全体がイエスについて語っています。

救い主に関する詩篇であるかどうかを見分けるには、新約聖書でイエスを指し示す目的で引用されているかどうかを調べればわかります。（ルカ 24 : 27,44 参照）

詩篇にはすべて歴史的背景があります。

詩篇には、未来に関する預言的メッセージが含まれていますが、同時に、歴史上の實在の出来事について記されています。

聖書学者の多くは、この詩篇を「王の詩篇」と呼びます。

ユダヤの王の即位について語る内容だからです。

また、自らの自由を得ようとする国民の反逆も描きます。

この詩篇は、イスラエルの民のもつ歴史背景を踏まえて書かれています。

主は、ご自身の預言者や士師たちをとおして、イスラエルの民をご自身の手で納めておられました。

しかし、民は王を求めました。（サムエル第一 8 章）

民がサウルを王としたとき、神はすべてご存知でした。

しかし、サウルはベニヤミン族に属していました。神は、創世記 49 : 10 で、王はユダ族出身でなければならないとおっしゃっていました。

それで、ダビデ王が神に選ばれ、王国を築きました。後にその一族から、救い主なる神がこの世に送られることとなります。

しかし、詩篇 2 篇はダビデ王の話から全世界の王国、そして、永遠の御座へと広がります。

これは、ダビデの子、イエス・キリストによってのみ成就します。（マタイ 1 : 1）

この詩篇は 4 つに分けることができます。

1. 民の声 (1-3 節)
2. 父なる神の声 (4-6 節)

3. 御子なる神の声 (7-9 節)
4. 聖霊なる神の声 (10-12 節)

では、1-3 節から見ていきましょう。

1. 民の声 (1-3 節)

この詩篇の著者はおそらくダビデです。彼は最初に、問いかけます。

「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。」

私たちの生きる現代社会は、神とそのみことばである聖書に完全に逆らう世の中です。

ダビデは、神に反抗する人々の様子に驚きます。

現代でも、神に反抗する人々の様子に私たちは驚きます。

この詩篇の冒頭は、人間の反逆に焦点を当てています。

人間の反逆は、3 つのかたちであらわれます。

a) 傲慢

2 節には、王や支配者たちが集まるとあります。彼らは、人々の考えや行動を先導しようと集まります。

私たちの生きる現代社会も、私たちの思考に影響を与えます。

影響を与えるものには、テレビ、映画、SNS、本、教育機関による教育などがあります。

好むか好まざるかに関わらず、世界の指導者たちは私たちの考え方に大きな影響を与えます。

英国での一例をここでお話ししましょう。

1885 年、英国では男性同士の性的行為は法律で禁じられていました。

この罪には終身刑が課せられました。

当時の人々はそれが間違っていると信じていました。聖書がそう語っているからではなく、民法が禁じているなら悪いことだと考えたからです。

1967 年になると、ある法案が可決されました。それは、男性同士の性的行為は公共の場で行われない限り合法とするものでした。

公共の場ではなくプライベートな場所で、双方が 18 歳以上であればよいことになったわけです。

そこから世論が変わり始めました。プライベートな空間でする限り、そのような行為は容認されるようになりました。

今日では状況はまったく違います。

2005 年に、同性婚と性転換が合法となったのです。

2 年ほど前に英国で行われた調査では、アンケートに答えた 9 割の人々が同性婚を支持し、人はそれぞれしたいことを選ぶ権利があると考えていることがわかりました。

100 年ほどの間に、英国の人々の意識は完全に変わってしまったということです。

それは、英国の指導者たちに影響を受けたからです。

法律の改正やテレビ、映画などをとおしてその影響はやってきます。

英国の指導者や影響力のある人々の大半は、神とそのみことばに逆らい続けていると言えます。

同性愛や性転換を肯定する流れは、神とそのみことばに真っ向から対立するものです。

これは単なる一例であり、ほかにもたくさんあります。

このような人間の反逆は、傲慢だけでなく、反抗心というかたちでもあらわれます。

b) 反抗心

この詩篇は、人間のあからさまな反逆が、聖書の神 (エホバ) とその油注がれたお方イエス・キリストに対するものだと語ります。この点をしっかり押さえておきましょう。

「有神論」というあらゆる神を肯定する考え方に逆らうものではありません。

宗教を目の敵にしているわけではないのです。

そうではなく、聖書に示された神に対する反逆です。

今日の世界では、どんな宗教でも受け入れられますが、キリスト教を勧めると人は腹を立てます。

それは、人間が自己中心的な性質を生まれ持っているからです。

人に自分の行いを制限されたくないというのが本音です。

これが、今日の世の中でキリスト教が一般受けしない理由です。イエス・キリストを主として受け入れ、このお方の支配に服従することが要求されるからです。

反抗的な人間は、神を主として認めたくありません。

これが今のあなたの考えでしょうか。

自分の人生をイエス・キリストに明け渡したくないから、という理由でクリスチャンになるのをためらっていませんか。

皆さんに私が言えることはこれだけです。地獄の王になるよりも、天国のしもべになるほうがはるかに良いのです。

次に、反逆は無秩序というかたちであらわれます。

c) 無秩序

リビングバイブルでは、3節は次のように訳されています。「さあ、神の鎖を断ち切ろう。神から解放されようではないか。」

現代人は、神が人間のために定められた境界や限界を破ろうとします。

創世記 1：26 にあるとおり、神は私たち人間をご自身に似せて造られた、と聖書は教えます。

ですから、人類には道徳的に果たすべき責任があります。

神があらゆる限界を定められたのは、私たちが自由で充実した人生を楽しむためです。

魚は水の中で生きるように造られたので、水の中で自由に泳げます。ピアニストはピアノの鍵盤の上で自由に自分の音楽的才能を表現することができます。同じように、人間は聖書の神が定められた境界の中で自由を見出すことができるのです。

自由とは、規則のないこととは違います。

神は、ご自身の造られた人間にとって何が最善かをご存知です。

詩篇の著者は、ほとんどの人間が神の支配から解放されることを望むと 3 節で語ります。

そうすることで、自由になれると考えるからです。しかし実際には、反対のことが起こります。自分自身を最悪の状況に追い込んでしまいます。

英国の有名な詩人コールリッジには、ある友人がいました。その友人は、優れたキリスト教教育を子どもに提供することが大切だとは考えていませんでした。その友人の教育方針は、子どもをまったく自由にさせ、自分でなんでも一番よいと思うことを選ばせるというものでした。

ある日、コールリッジは友人を自宅に招き、庭を見せました。

庭の半分は、手入れが行き届いていました。美しい花が咲き、芝生はきれいに整えられていて、雑草はまったくありませんでした。なんとも見事な庭です。

友人は言いました。「りっぱな庭だね、だけれど、こっち半分はどうしたんだい。雑草が生え放題でめちゃくちゃだ。」

コールリッジは答えました。「こっち半分は、私の手をかけずに、まったく自由にさせて、庭の思い通りにさせておいたのだよ。キリスト教教育を受けさせずに育てようという教育方針を君に考え直してもらおうきっかけになればと思ってね。」

友人はコールリッジを見つめて、「なるほど、納得した」と言いました。

2. 父なる神の御声 (4-6 節)

では、このような反逆に対して、神はどのように応じられるでしょう。

詩篇の著者は、神が 3 つのかたちで応じられると語ります。

a) 神は笑われる。 (4 節)

私たち人間は、ふたつの理由で笑います。

まず、おもしろいときです。もうひとつは、不可能なことに対してです。

詩篇の著者がここで伝えようとしているのは、このふたつめの理由です。

全能ですべてを支配しておられる神が、天から笑われます。

人が造られた本来の姿を変えようとしたり、神なしで生きようとしたりすることに対し、神は笑われます。

b) 神は怒りをもって語られる (5 節)

神の愛の御声に聴き従わないと、神はさばきをくだされます。

神は、状況をとおして私たちに語られます。神に逆らって生きた後、クリスチャンになる人がたくさんいます。

神なしの人生を生きようとしたけれども、平安や充実を得られなかったからです。

神は、人を罪に引き渡されますが、その行き着く先はさばきです。

神なしに生きようすると、雑草が生え放題の庭のようになり、美しい人生とは言えません。

c) 神の御声は神の立てられた王を通して語られる。(6 節)

この個所が指し示す王とは、ユダヤ人の救い主イエス・キリストです。

これは救いの詩篇です。そして、神がイエス・キリストをとおしてご自身の御国をすでに建ててられたことを示します。

ダビデがこの詩篇を記したときに、神の視点ではすでに、イエス・キリストの御国が建てられていたということです。

人間の反逆に対する神の応えは、イエス・キリストです。

ダビデは、当時のイスラエルの王として神に選ばれました。

今、普遍で万国共通の王として、神の御子イエス・キリストが選ばれています。

マルコ 1:15 「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

黙示録 11:15 第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」

今現在、神の御国は目に見えません。しかし、黙示録によるといつの日か、目に見えるようになります。

私たちは自分自身に問いかけなければなりません。私たちはどの国に属しているのでしょうか。

神の御国でしょうか。それとも、サタンが支配するこの世の王国でしょうか。

エペソ 2 : 1-3

2:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。2:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

神の恵みの福音だけが、イエス・キリストを信じる信仰によって、人類の反逆に対する答えを与えてくれます。

エペソ 2 : 4-10

2:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、2:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——2:6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。2:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。2:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。2:9 行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。2:10 私たちは神の作品であって、良い

行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

3. 御子なる神の御声 (7-9 節) ここで著者は、3つのことを教えてくれます。

a) イエス・キリストは唯一無二のお方。 (7 節)

イエス・キリストについて、神が「生んだ」と記されています。
英語の新欽定訳では、「begotten」という単語が使われています。
これは、興味深い古典英単語で、存在する前の状態から生み出すという意味です。
原語ギリシャ語では、このお方が唯一無二の比類ないお方であることが明らかです。
つまり、イエス・キリストが神から生み出され、三位一体の神の一部であり、このお方のような人物は他にいない、唯一のお方であると、著者は言っているわけです。

b) イエス・キリストの普遍の権威 (8 節)

神は、世界中の国々の権威をイエス・キリストに約束なさいました。
これが、世界宣教の根拠です。私たちは、イエス・キリストの福音を世界中に告げることができます。それは、イエスが世界中の人々を救うことができになるお方だからです。

マタイ 28 : 18-19

28:18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。 28:19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、

c) いつの日かイエス・キリストが最終的にすべての国民に対して勝利する。 (9 節)

ここに記された「杖」は羊飼いの杖です。
イエスは、羊飼いなる王です。
イエスの権威に進んで従わない人に対しては、羊飼いの杖が「鉄の杖」となります。
最終的には、率先して従う人もそうでない人も、イエス・キリストの権威にいずれ従うこととなります。

ピリピ 2 : 9-11

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。
2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、 2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

4. 聖霊なる神の御声 (10-12 節)

10-12 節で、著者は大切なことを 3つ教えてくれます。
これらの教えは、私たちの考え方や意志、感情に影響を与えます。
つまり、全人的な影響ということです。

a) 賢明に教えを受け入れる。 (10 節)

著者は、賢くありたいなら神とそのみことばである聖書に逆らわないことと語ります。私たちは、聖書から教えられる必要があります。
30年以上前になりますが、私がスコットランドのエジンバラにある聖書学校で学んでいたとき、たましいを勝ち取るという授業でたくさんのことを学びました。
ある生徒が「人が新生しているかどうかはどうすればわかるのですか」と講師に尋ねました。
すると講師はふたつのしるしがあると答えました。神のみことばの「教えを受け入れる姿勢」があることと、クリスチャン同士の交わりを「求める」ことです。
他のことも言われましたが、そのふたつが私の頭にしっかりと残りました。
自分はクリスチャンだと言うなら、その教えや知恵の源は聖書であるはずで、
ですから、聖書を毎日読むことは、賢明なことであると同時に、私たちに知恵を与えてくれます。

b) イエスに誠心誠意仕える (11 節)

「恐れつつ【主】に仕えよ。」というのは、聖なるお方への畏怖です。主に仕えるとは、自分の意志を捨てて、神のみこころに従うことです。私は以前、今は亡きスティーブン・オルフォード師のメッセージを聴きました。オルフォード師はコリント第一 15 : 58 から語られました。

コリント第一 15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。

そのときの言葉を私は今も覚えています。

それは、「つねに主の働きに富む」という内容でした。

オルフォード師は、主のための働きをすることと主の働きをすることは違うとおっしゃいました。

主の働きをするには、神のみこころに自らを明け渡し、その働きのために聖霊の力をいただく必要があります。

神の聖霊に完全に頼り切らなければなりません。

神の働きだからです。

一方、主のために働くのは誰でもできることです。けれども、そこに霊的な価値はないかもしれません。

主の働きをするには、人生がかかっています。

自分のいのちも人生も主に明け渡して主の働きをしようと思いませんか。

c) 私たちの感情を聖別する。

古代社会では、王に対する忠誠を示すため、王の手や頬に口づけをしました。

ユダは、ゲツセマネの園でイエスに口づけをしましたが、まったく意味のないものでした。

一方、イエスに対する私たちの思いには、意味があるはずですよ。

それが著者の言おうとしていることです。

ここで尋ねます。

あなたの心はイエス・キリストに動かされていますか。

つまり、

イエスはあなたにとって現実のお方でしょうか。

私はクリスチャンになった当時、涙なしに証を語ることはできませんでした。

それは、証を語ると心が動かされ、イエスが私の中で現実のお方となった日の気持ちがよみがえるからです。

イエスは、私にとって現実のお方となりました。

イエスは、あなたにとって現実のお方でしょうか。

もしそうでないなら、今日、そうになっていただけます。

詩篇の著者は、「幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」と締めくくっています。

あなたも今、イエス・キリストを信じるなら、永遠に幸いな人となれます。